

---

# ぽっちゃり氷竜

草紅葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぼつちやり氷竜

### 【コード】

N7089Z

### 【作者名】

草紅葉

### 【あらすじ】

登場する生物

?ぼつちやり系推進女子一名

?見た目ただの肥満体中年（氷竜）一頭

主に上記の一名と一頭が出会い恋を通り越してまず夫婦になり、ほのぼののんびり恋に落ちていくお話です。

このお話は超不定期更新の上、短編連作系になる予定でございます。

## 出会う

「……………誰？」

目を覚ますとそこは自宅ではなく、日本百景にでも選ばれていそうな美しい雪山で……………目の前にはぼっちゃり系のオッサンがいた。

「……………ええつと、僕は氷竜だけど。君は？」

ぼっちゃり、触ればぼちゃぼちゃして波打ちそうな豊かなお腹を押し潰し屈みながら、雪の上に横たわる私へ名乗り、問いかけるオッサン。

可愛いな、ポツコリと突き出たお腹を見つめ……………触れてみたい衝動に駆られる二十代前半の乙女が一人。

「あの、とりあえずそのとっても魅力的なお腹に触れても……………良いですか？」

聞くは一瞬の恥、聞かぬは一生の悔いでしょう！だって、その揺蕩<sup>ゆた</sup>うぼっちゃりお腹が、さあ触ってごらん？その瞬間、君を夢の世界へご招待しよう！と私を誘うのだもの！！

「……………え？君、大丈夫？」

何か聞き間違えたような、困惑したような表情で私を見つめるオッサンを見て……………今更違和感が。

「やっぱり……………僕の住む山に人間の、しかも若い娘さんが迷い込むなんておかしいと思ったんだ」

そう言って、深いため息を吐くオッサン。

……良く見れば、このオッサン髪は青いし服は神話の神様みたい  
に長い布を巻きつけただけだし、本当に今更だけど此処雪山だし、  
夢の中で夢でも見てんのかな？

「とりあえず……ここじゃあ人間の君には寒すぎる。凍死してしま  
う前に、僕のお家へおいで」

勝手にぶつぶつ独り言を呟いてぶよぶよした柔らかかそうな顎肉を  
揺らしていたオッサンは、そのぽっちゃりした身体のどこにそんな  
筋肉が？と聞きたくなるほど軽々と自然に私を抱き上げ……どこへ  
向かうのかも知らせぬままえっちらほっちらと歩き出した。

「……ふふ、ふふふ」

ぶよぶよ、ぽよぽよ、ぷるんぷるん……足を進めるたびに揺れる  
肉付きの良い腕の中。一方の私は、抱き上げられ心地抜群の柔らか  
な脂肪の感触を心行くまで楽しんでるのだけ……ふとにやつき  
ながらオッサンを見上げれば何故かヤツは憐れんだ眼差しでこちら  
を暖かく見守っている。……何故だ？

## 婚姻す

「ん？」

ぼちゃぼちゃしたその暖かな腕の中で眠りについた私が目覚めたのは、またも見知らぬ場所。暗くて良く見えないけど、多分……洞穴とか洞窟とかそんな感じだと思う。

「目が覚めたかい？」

寝転がったまま横向きになれば、そこにはあのぼっちゃり系のオッサンがいた。しかも物凄い近い所で私を覗き込んでいたので……とりあえず抱き着いてみたけど何か？

「……とうっ」

「うわあっ」

丸いオッサンは私のタックルに耐えられず、あえなく二人で床を転がる羽目に……。

「い、いたたっ。……氷竜の僕に抱き着くなんて、やっぱり君は人間の手には負えなくて捨てられたんだろう？」

「はあ?!」

氷竜って……オッサンは見た目的に人間だと思っただけど？

「……君、人間の村娘にしては柄が悪いね」

「放つておいてください」

ふんつと鼻息を荒くしてもその魅力的な腹からは意地でも離れない私の様子を見て、オッサンは一つため息を吐き……

「僕は氷竜だから冷たいだろう？抱き着いていると身体に悪いよ？」

本当に心配げに声をかけて来たので、腹に貼りつけたまままでいた顔を上げてオッサンを見上げる。

青い髪に同じ色の瞳と眉を八の字に歪めて、たばたばした顎肉を三重に押しつぶしてこちらを見下ろすオッサンは……可愛い。

「あのねえ、私は地球って星の日本って国のとっても寒い土地出身なの。オッサンが何者でもどうでも良いし、冷え性の対策ぐらい自分で出来るから大丈夫」

「……ちきゆう？にほん？」

ああ、やっぱりな。聞いたことない単語を耳にしたって顔のオッサンを見て、何となく諦めた。今は、そう……この暖かなぽっちゃり系の柔らかな腹があるし、顔を埋めてじっとしていると安心して、何となく何とかなるような気がしてくる。

「あ、そっちは気にしないで。とにかく！今言いたいのは寒さには強いですってこと」

そう言いきった私は、とりあえずじっとオッサンの反応を待つ。

「……僕に抱き着いていても寒くないのかい？」

「ん、むしろ暖かいし」

すると、オツサンは突然私をそのぽっちゃりしたまあるい腹で押しつぶすことに決めたらしく視界が真っ暗になりついでに息が……。

「……むぐぐっ」

「なんて幸せな日だろう！！君が村人の手に負えない子で本当に良かった！！捨てられて万歳だよ！！」

何言ってるんだこのぽっちゃり系のオツサンが！！第一に、私は別に捨てられてないし！！捨てられて万歳ってなんだよ！！

「殻から生まれて幾百年！！……あれ？もう千年ぐらい経ったかな？ううん、まあ良いや。兔に角」

ぱつと手を離されて、これ幸いと私は思い切り息を吸った。

「君の名前、今日からマジユネッタだから」

とにかく酸素不足の肺に必死で酸素を吸い込んでいた私には、知らないうちに新しい世界で新しい名前が名づけられましたトサ。

「って、なんで？！」

ぶんつと音が聞こえそうなくらい勢いよく顔を上げると、そこには当たり前だけどオツサンの顔が……



「マジユネッタ、僕にも名前付けて」

その名を呼ばれて深い青の瞳に見つめられていると、何故だか知らないけど、不思議と知らない名前が脳裏に浮かんで……気が付けば私は自然とその名を口にしていたらしい

「……ビエネ、ビエネートル」

「うん、じゃあ僕は今日からビエネートルだ。あ、他の生物に名乗るときは氷竜が妻と名乗るんだよ？マジユネッタの名前は僕だけが知っていれば良いんだから」

……いや、だから何がどうしていつオッサンの妻になったんでしょうね？

このオッサンが実は本物のファンタジー系氷竜で年が千年くらいだつて事実は実のところ全く以て信じがたいけれど、まあ自分自身が地球と言う異世界の星からやってきたらしい以上認めざる得ない。

「これぞまさに、事実は小説より奇なりつてやつよね」

そして、氷竜はその名の通り氷を操り、尚且つとてつもなく寒い土地に住む生き物らしくて、しかもオッサン自体が氷点下の体温しかないと言うとんでもない生物なわけだ。あげく、竜つて言う生き物は元を正せば爬虫類みたいなものだから他の竜たちは皆、比較的暖かい地方を住処としていて、仲間と言える生物が今の今まで存在していなかったいい歳した引きこもりのオッサンは寒さを物ともしない私を見つけこれ幸いと、指輪の交換ならぬ名前の交換をしたわけだ。

「……ねえ、オッサン。私は別に此処で一人生き残るすべなんて持っていないし、むしろ雪山に置き去りにされたらたどり着くのは凍死だけだから、拾われた命だし結婚しても良いけど」

文句どころか、その柔らかな腹に毎日抱き着く口実が出来て、尚且つ衣食住を賄ってもらえるわけだしむしろ感謝だけだ。

「でも、オッサンは良いの？私みたいな普通の人間が嫁に来たところで悪いけど料理へただし、竜つて卵生でしょ？卵なんて産めないし、何にも出来ないけど」

オッサンの柔らかな身体をソファ代わりに背中を預けてその太も

もに腰掛け、後ろに首をひねって問いかける。

「マジユネッタ、折角名を付けたのだし出来ればビエネートルと呼んでくれないかい？」

此処へ来るまでの憐みの眼差しは一体なんだ？ そう問いただしたくなるくらい今現在私を見つめるオッサンの眼差しはとてつもなく甘い。

「……ビエネートル」

ぷにぷにと可愛いオッサンの両手を掴んで遊びながらしぶしぶとそう呼ぶ私。

「大丈夫、子供は母親が一番産みやすい姿でこの世に出てくるんだ。それに、僕の主食は氷だし」

……氷食つの？ 外にあるやつ？

「そもそも竜の特徴は大きく分けると三つある。一つ目はとても強いと言うこと。二つ目はとても愛情深いと言うこと。三つ目はとても寿命が長いと言うこと。僕等は長命種だからなのか子が出来ずらくてね……何千年生きてても、生涯子に恵まれない夫婦もいるくらい。だからこそ、自分の奥さんや旦那さんをとつてもとつても大事にして、ありったけの愛をたっぷりささげて生きるんだよ。子供が出来ればそれこそ夫婦だけじゃない、竜種全体のお祭り騒ぎでお祝いされて、皆が子育てを手伝ってくれるし」

「ふうん」

「それに、僕等って遙か昔から伴侶をどろどろに甘やかす傾向にあるんだ。」

……どろどろっ..

「だから、マジユネットが何もしたくないなら何にもしなくて良いよっ。」

## 旅行計画

「何もしなくて良いよ」

……ぼっちゃり系のオッサン、もとい私の夫ビエネートルがそう言ったので本当に何もせず我が家である洞窟内の藁の上で寝そべり過ごすこと早数日。

「……ねえ、毎食これなの？」

ビエネートルは外にある天然水百パーセント配合の氷を食べているらしいから良いけど、私の食事はオッサンの持つてくる肉のみ。それも骨付きで新鮮な血の滴る野性味溢れるサバイバル料理で、料理法はただ焼くだけ。

まあ、自分で何もしていない以上文句も言えないかと黙ってはいたけどもう限界。一生この骨付き肉だけを口にして生きるくらいなら少しくらい動きますよ。

「え？僕の知り合いはこれを出すととっても喜んでくれるんだけど……」

「ただ肉肉食系な人間でしょうか？って言うかこんな山奥に遊びに来るような人間他にもいたのか？！」

「たまには他の物も食べたい。それとその人間の知り合いにも会いたい。って言うか一生ここで生活するの？」

「やっぱりどんなファンタジーな山でも麓まで下りれば村とかあるでしょう？」

「人間の食べ物かあ……あの子は今どこにいるか分からないし」

……その柔らかな三十顎に拳を当てて考え込んでいるピエネートルをドキドキと期待に胸を弾ませて見守る私。

「麓の村は前に一度雪崩を起こして全壊させちゃったから、後数百年は顔を出せないしなあ」

……うん、聞かなかったことにしよう。折角ファンタジーな世界で楽に生きると決めたんだし、オッサンが私と会う前に何してようが関係ないよね?!

「じゃあ、色々と聞きたいこともあるし……人間と結婚した同族に会いに行こうか?」

おお! まともそうな相手が見つかったらしい。良かった良かった!!

「うん! それが良いと思う! それで? 相手はどんな童なわけ?」

寝そべっていた藁のベットから起き上がり、期待に目を輝かせてオッサンへと詰め寄ると

「一応人間の姿で彼らの集落に溶け込んで生活しているみたいなんだけど、そういえばもうここ三十年くらい連絡も取っていないなあ……」

……え?

「三十年……それ、本当に大丈夫なんでしょうね？」

三十年って、長すぎでしょ?! 相手が人間で三十年も経ってたら生まれて恋愛して結婚して子供産んで子育て真っ只中じゃ……引越しか、してないでしょうね？

「ううん、多分」

「多分って、怪しすぎるんですけど」

はあ、とため息を吐きながらオッサンの大きなお腹に倒れ込む私。期待した分なんか疲れた……。

「でもまあ、あそこは都会だし……会えなくても色々観光するのも良いんじゃないかなあ？」

「はっ！」

その観光、の言葉を聞いて思い出した。

「私達って、新婚だよな？」

柔らかなお腹に伏せていた顔を上げ、オッサンへ問いかけた。

「ううん？人間ではどう言うか知らないけど、僕等の表現では蜜月と呼ばれているよ」

オッサンは一生懸命顎についた三十肉を押し潰し視線を下げて私を見ようとしているけど、どうにも上手くいかないみたい。微笑ましくていつまでも見ていたいけど、それじゃあ話が進まないし！え

えと、人間では新婚で竜では蜜月で……って

「そうじゃなくて、呼び方なんてどっちでも良いけど！とにかく！私たちは結婚したばかりってことが重要なの！！」

つい興奮のあまりオッサンの腹に手を着いて身を乗り出してしまったけど、今更そんなことどうでも良い！！

「……結婚したばかりだと、何か問題があるのかい？」

そんな私戸惑ったように見つめるオッサンへ叫んだ！！

「結婚したばかり夫婦は旅行へ行くものなの！！観光じゃなくて新婚旅行！！」

ちよつとばかり大きな声で叫び過ぎたか……洞窟内に私の声が反響してやまびこ状態だ。

「……し、しんこんりょこう？」

「そう！！私のいた場所では、結婚したばかりの夫婦は新婚旅行を経て愛を育むものなの！！」

最終的には拳を握ってオッサンへ新婚旅行がいかに楽しく幸せで初々しい夫婦にとって大事かを説いていた私は、ふと黙ってその話を聞いていた夫の顔へ視線を落とす。

「……………」

……またしてもオッサンは甘い視線で私を見つめていて、今の話



しのどこにそんな要素が？

「じゃあ、その新婚旅行って言うのに出かけようか」

「え？本気で？」

「うん」

そんなに呆気なく決めちゃっていいの?!と私は握っていた拳を解き、オッサンの頬肉へと両手を添えてもう一度聞きなおしてみた

「真面目に言ってる？お金もなさそうなくせに」

「お金は持つてるよ？もう何百年も生きてるし。まあ、さすがにここには置いていないけどね。それに、その新婚旅行へ行くことでマジユネットともっと仲良くなれるならとっても嬉しいし、君が夫婦の愛を深めたいと思ってくれているなんて……僕は今この世界に生きるどの竜よりも幸せだよ」

「ううん、まあ……なんかちょっと違うけど、まあ大体は合ってるから良いよね？旅行に連れて行ってくれるって言うんだし!!」

「……ねえ、その知り合いの住んでる街って遠いの？」

新婚旅行へ行くと決まってるからと言うもの、私は毎日同じような事ばかり聞いている気がする。

「ううん、そうだねえ。人間の足で行くこととっても遠いらしいけど、僕は歩いて行ったことがないからなあ……」

オッサンはのんびりと、私をその膝に座らせて背もたれ代わりにその柔らかいぽっこりお腹に体重をかけられても、甘い口調で何度となく繰り返される質問にも呆れることなく答えてくれる。

「ふうん？歩いて行かないって……じゃあ竜らしく飛んでいくの？」

ぶにぶにしたオッサンの手のひらを悪戯しながらそう聞けば、

「そうなるかなあ？でも、実は僕……暑い所が苦手なんだ」

神妙にそう告げたオッサンに、私は笑う。

「ふふつ、氷竜なんだから当たり前でしょ？なに？もしかして旅行先は暖かい地方なの？」

「ええ?!知っていたのかい？さすが僕の奥さんだけはあるねえ」

うんうんと、驚いたのもつかの間で全身のお肉を揺らしながら嬉しそうに頷くオッサン。

「ねえ、だから、暖かい所なの？」

「ん？そうでもないけど、行く途中に国を幾つか跨いで飛ぶからね。その中の一つに気温がとても高い国があつて、そこを飛ぶ時は氷を大量に食べないと体温が保てないかもしれないなあ」

……え？それって私はどうすれば良いの？思わずオッサンの膝の上で固まってしまった。

「だから、マジユネッタは僕に氷を食べさせて欲しいんだけど……駄目かなあ？」

「口って、オッサンの口に？竜の口に？」

どっちも同じじゃないか！！と分かつていても、人型のオッサンしか見たことないし……飛んでる竜の口に氷入れるって。

「オッサンって、ぼくは」

オッサンはオッサン呼びが気に入らないらしくむにむにした唇を無理してタコのように尖らせて見せたので……なんだか可愛く見えたのでしぶしぶ名前と呼んであげる。

「はいはい、ビエネートルね。それで、飛んでる途中で竜の背中に乗ったまま口に氷を放り込むなんて芸当私には出来ないから」

「ん？背中に？いやいや、背中には乗れないよ？危ないからね」

んん？！思わ眉間に皺が寄る私。

「背中には氷を背負う予定だし。移動するときには僕の首に籠を下げるから、それに乗って貰おうと思っただけだ」

首に、籠？氷を背負うって……食用？

「……ふうん、まあ、安全なら何でもいいや。それで？いつ行くの？」

楽しい新婚旅行の話をしているときに面倒事は置いておこう。数ある疑問も、今のところはとりあえずどこか遠いところに放り出す。聞きたいことは沢山あるのだし、オッサンの食用氷の事まで聞いている暇など私には無いのだ！！

## 準備

「ふおおっ」

今、私の目の前には青銀色の竜が座り込んでいる。とても大きくて、恰好が良いけど……やっぱり想像していた通りお腹周りがぶよぶよしていた。

「マジユネッタ？」

巨大すぎて見上げることはもう諦めた。と言うより……飽きた。

「オッサン、じゃなくてビエネートル。持っていくものはこれで良いんでしょ？」

私が乗り込むことになった籠は、真っ白な植物が細かに編み込まれた二畳くらいの籠で。ビエネ曰くとっても丈夫で、買ったら実は高価らしいけど、私が来なければ洞窟の奥深くでいつまでも埃にまみれて眠っていたらしいのでまあ良しとしよう。

「うん。マジユネッタの食糧は生ものが多いからあまり持っていないし……途中で補給しながら行く予定だしね」

何かの革紐、と言っても竜サイズだから私にとつたらそのままマントにもできる横幅の物を籠にセットしてビエネートルの首へ下げ、中身を確認すれば。

……燻製にされた肉が小さな皮袋に押し込まれ、骨の一部が袋の口から飛び出していた。他には特になし。いつもは藁の上で2人丸ま

って寝ていたから毛布らしいものもないし、水はビエネートの氷を少し分けてもらえば良いわけで。

「じゃあ、後は氷ね。どうやって背中に背負うの？」

顔の位置が高すぎて見上げるのはもう飽きたけど、首から下はいつも通りぼっちゃりしていて可愛い。大きな爪の生えている手も足もぶにぶにだし、お腹周りは他の部位と違って色が少し淡くて尚且つさらにぼちゃぼちゃしているのだ。そこから背後にまわり尻尾を見れば、しっぽの先が何故か知らないけど青銀どころか物凄く濃い藍色をしていた。背中とかは普通に青銀色なのに、変なの。後は背中に生えた羽があるけど、ここはまだ洞窟内であまり派手なことをすると下の方で雪崩になるらしいから……そこはまあ、止めといた。

「一応竜族の仲間が、僕の五百八十六回目の産まれ月に死んだ曾曾大爺様の竜の皮で作ってくれた大きな革袋があるから、それに入れて行こうと思うんだ」

「……へえ」

オッサンが何歳かなんて今更だから、曾曾大爺様の皮？で出来るっ事に驚けばいいのか……何なのか。とは言っても、私が遠い目をしたのは一瞬で、脳内はさっさと切り替わる。さっさとその巨大な皮袋に氷をたんまりと詰めて出かけましょう！！善は急げって言うしね？

「じゃあ、先に僕が外に出て皮袋に氷を詰めたらマジユネットを呼ぶからね」

「はいはい」

私は静かに、のっしのっし、とその親戚の御爺様竜の皮で作られた革袋を背負い洞窟の外へと歩いて行く。ピエネートルを見送った。

## 空と休憩と約束

「…………ふぁ」

ああ、つまらん。

ここは上空数千メートル雲の上で、ビエネの首に吊るされた籠の中にいる私は一人……正直暇すぎて暇すぎて眠くなってきた。

「籠つて、蓋付きだし……ビエネツールも空も見えない」

視界には、中身が少し減った骨付き肉の飛び出た革袋と自分の入っている籠の内側だけ……。

「何てつまらない空の旅…………」

何もすることがないと言つのもある意味疲労がたまると思つし、雲の上で吹きかす風が強すぎて、思い切り叫ばないとお互いの声も届かないものでまったく色んな意味で疲れます。

「マジユネットア！！そろそろ休憩しようかぁ！？」

自宅、と呼べるかは分からないけどあの洞窟を飛び立ってどれほどの時間が過ぎたのか……うとうととしていた時間の方が長すぎてあまり覚えていないけど、やっと知らない国へ降り立つときがやって来たらしい。

「了解！！」



あ、ちなみにあの熱地帯はもう通り過ぎたので氷も解けてなくな  
ってしまった。と、言うわけでどこかの国のどこかの町へ食事をと  
りに行くらしい。

「……普通、あんなに大きな竜が町へ降りたらパニックになると  
思っただけど」

大丈夫なのだろうか？

どおしん、とか、ずどおん、とか……降りた時の衝撃音はそんな  
感じだったと思う。

「……おおい、ビエネートル？早く出たいなあ」

返事はない。

「放置……？」

もう少ししたら自力で這い上がって出てやろうとか考え始めた頃

……何が籠にぶつかった。

しかも何か話し声も聞こえて来たし、え？ビエネートルだよね？

「……」

どきどきと波打つ心臓を押さえ上にある籠の蓋が開くその瞬間を待つ。

すると以外にも簡単に、かぼつと気の抜ける音が聞こえたかと思えば……籠の中にはポカポカと暖かな日差しが差し込んできた。

「マジユ、待たせてごめん。今出してあげるからね」

……散々待たせておいて、マジユ？そんな呼び方を許可した覚えは……

「オッサン、その呼び方」

「ああ、前にも言ったと思うけど僕ら以外の生物が存在している空間では」

話しながら器用にも私の両脇に手を添えて引っ張り上げるオッサンは、わざわざ視線を合わせ

「絶対に、名前を呼んではいけないよ？」

「……あ、うん」

私は、文字通り地に足のついていない状況のまま……ゆっくりと頷いた。

「誰に聞かれるかもわからないし、外では愛称で呼び合うことにしよう。名乗るときは、氷竜の妻ですと言えば良いからね」

あ、はい。

オッサンの妙に真剣な眼差しを向けられ、私は反抗など出来るわけもなく。

「じゃ、これは夫婦の約束だからね？」

「……はい」

そう返事をしてやっと、私の両足は大地を踏むことが許されわけだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7089z/>

---

ぼっちゃり氷竜

2012年1月9日22時50分発行